

『合意形成学』

編著者 猪原健弘 出版社 勁草書房

◇本書の目的

現代社会では、気候変動対策や核兵器問題、テロ対策など、国際的な合意が形成されるべき、さまざまな問題が発生・継続している。また、日本国内にも、空港、ダム、幹線道路、基地などの建設・維持・移転など、多様な意見を持つ多くの人々の合意形成を必要とする問題が多い。

すでに発生・継続している問題は効率的な合意形成手法を用いて一刻も早く解決されるべきであるし、また、そのような問題を発生させないためにも適切な合意形成方法が利用されるべきである。しかし現状では、合意形成についても理論的基盤が十分には整っていないこと、また、既存の合意形成方法がしばしば特定の個人のコミュニケーション能力や調整能力に頼りすぎることで、そして、合意形成の実践事例の体系的な蓄積が少ないことなどにより、効率的かつ適切な合意形成の実現はきわめて難しい。

本書は、合意形成の「理論」「方法」「実践」という3つの側面についての知識体系を整備し、「合意形成学」の構築を目指すものである。

◇本書の特徴

本書は、第1部「合意形成の理論」、第2部「合意形成の方法」、第3部「合意形成の実践」の3部構成である。

「合意形成の理論」としては、用語体系や概念枠組を整備することが必要である。合意や合意形成の意味を明確に定義し、合意形成が必要とされる状況やそこで達成される合意を、さまざまな概念で分類できるようにするのである。また、分析枠組を構築して、何が研究対象であり、どのような研究方法があり、どんな問題を解決できるのかを明らかにする。そこでは、合意や合意形成の性質、合意形成方法、合意形成の実践などが研究対象となり、また、言語、実証、数理、シミュレーションなどの研究方法が用いられる。さらに、「合意とは何か、合意形成とは何か、関連する重要な用語には何かがあるか」、「合意と合意形成がもっている性質は何か、もつべき性質は何か」、「どのような合意形成方法がどのような状況に適しているか」、「合意形成が他の手段に比べて優れている点は何か」などの問いに答えることが目標となる。

「合意形成の方法」としては、既存のさまざまな合

意形成方法の理解、評価、比較、改善と優れた合意形成方法の開発が必要である。評価方法の評価や比較、改善も行うべきである。

「合意形成の実践」としては、個別分野における合意形成の事例を蓄積し、体系的に分析し、理論面や方法面へのフィードバックを行わなければならない。本書がより多くの方々の知的関心をひき、合意形成研究への参加をうながすことを、また、本書を基盤として「合意形成学」の構築に貢献していくことを、そして、合意形成学が構築されるであろう近い将来、本書が合意形成学の基本書の一冊に数えられることを願うものである。

(本書はじめに(猪原健弘)より引用)

◇構成

序章 合意形成学の構築(猪原健弘)

第I部 合意形成の理論

第1章 社会理論における合意形成の位置づけ
—社会統合から社会編集へ(今田高俊)

第2章 合意の前提となる相互協力関係の生成と崩壊
(中井豊)

第3章 プランニングにおける合意形成(原科幸彦)

第4章 合意形成と法的拘束力(金子宏直)

第5章 合意と合意形成の数理——合意の効率、安定、存在(猪原健弘)

第II部 合意形成の方法

第6章 合意形成のモデルと方法(木嶋恭一)

第7章 討議型意識調査手法「Deliberative Poll」の実験(坂野達郎)

第8章 合意形成を支援するツール(新田克己)

第III部 合意形成の実践

第9章 社会基盤整備での社会的合意形成のプロジェクト・マネジメント(桑子敏雄)

第10章 社会資本の整備・管理と合意形成
(内藤正彦)

第11章 生殖の医療と合意形成(吉武久美子)

第12章 IT化の進展と合意形成(松本光崇・江渡浩一郎)

終章 展望



A5版/282頁